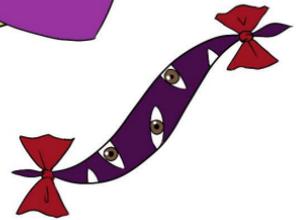


楷ノ木かえで
Kainoki Kaede

夜は短し
恋せよ少女



「トゲ」



夜は短し恋せよ少女

楷ノ木かえで

注意！

この作品は森見登美彦先生作『夜は短し歩けよ乙女』のネタバレを大量に含みます。
引き返すなら今のうちです。



「偽電氣^{にせ}ブラン」というお酒をご存知だろうか。
いや、知らなくとも無理はない。

お酒に関しては人並み以上と自負している私ですら、蓮子にその名を聞くまでは寡聞にして知らなかった秘密の品である。一般に広まっている名前でもあるまい。

蓮子がいつもの嬉々とした様子で、「メリー！ 『偽電氣¹ブラン』を探しに行くわよ！」と言ってきたとき、私は思わず「ホルムアルデヒドを体内に溜め込みすぎて、ついに幻を見るようになってしまったのね、かわいそうな子……」と哀れみの視線を送ってしまったほどだ。

「あー、その目は信用してないでしょ！ 大丈夫よ。きちんとした筋からの情報だから。」
「本当にきちんとしている人は、自分のことを『きちんとしている』なんて言わないわよ？」

大学の授業の合間、工学部裏手にある行きつけの喫茶店で濃いコーヒーを味わっていたところに、こんな濃い人物と濃い情報が一度にやってきたのだ。口も頭もどつぱりとブラックに染められて、日

1 心靈スポットとか、境界への入り口とかを見つけてくる時のように、いつもの。

本食が恋しくなってくる。

「そんなのメリーの偏見でしょ。私の周りのきちんとしている人間はみんな口を揃えて『自分はまっとうに生きている素晴らしい人間だ、こんな人間が世に認められず大学の片隅で朽ち果ててゆくなんて勿体ない』と言っているわ。」

「それって蓮子による観測でしょうか？ ちゃんと調節キリツレレコンされていない装置で観測しても、狂った結果しか得られないわよ？ 実験物理学の基本じゃない。」と言いながら私はコーヒーカップを置いた。口の中の苦味が取れない。こんなドロドロした話じゃなくて、レモンのようにさっぱりした話題は無いものかしらと思ったが、カーンと冴えた話を蓮子に期待しても無駄だとすぐに諦めた。

○

はじめまして。宇佐見蓮子と申します。

この度は、秘封倶楽部活動日誌「偽電気ブラン編」をお手にとつてくださりありがとうございます。この本は、秘封倶楽部の部員であるマエリベリー・ハーンと私が、夜の京都を走りまわって、ついには幻のお酒「偽電気ブラン」に辿りつくまでの壮絶な体験を物語にしたものです。

「偽電気ブラン」なんて聞いたこともない、という方も、この本を読めばきっと飲みたくなるでしょう！

是非みなさんも「偽電気ブラン」を飲みにも京都の街に繰り出しませんか？

この本の読者の方々が、この本を通して、京都の不思議に少しでも興味を持っていただければ、それに越した喜びはありません。

それではごゆつくり、幻想に包まれた京都をご堪能下さい。

宇佐見蓮子

○

「メリーは小津さんという人を知っているかしら？」

私の前にどっかり座って店員さんにココアを注文したあと、蓮子はこう切り出した。

「小津さん……？ 流石にそれだけでは情報不足ね。どんな人なの？」

「えつと、彼には72通りの素顔があるから、なんて言えはいいのか……。たしか、工学部って言うてたわ。あ、あと、映画サークルに所属しているって。サークル名はたしか『なつのしるし』とかかなとか……」

72通りも素顔がある人物がきちんとした筋を持っている可能性は極めて薄いな、と思いつつ、私はコーヒーマスターをもう一口すすった。濃厚な苦味の中に隠されたうつつとした甘みが、私に理性を与え

てくれる。そもそもうちの大学の映画サークルは『みそぎ』じゃなかったかしら。目の前のかわいそうな女の子の頭の中で、一体どんな脳内変換が行われたのだろう。

「それで？ いったいその小津さんがあなたに何を吹き込んだの？」

私が尋ねると、蓮子は目をギランギランさせて言った。

「なんでも、京都にある108つの裏路地のひとつに、幻の銘酒『偽電気ブラン』を出す酒屋があるらしいの。面白そうでしょ、メリー？ 一度飲んでみたいとは思わない？」

偽電気ブラン。電気ブランなら聞いたことがあるのだが、その偽物に関しては聞いたことがなかった。私が興味を持ったとわかったのか、蓮子はふふん、と鼻を鳴らして、その曰くつきのお酒の話を開始した。

甘つたるい匂いのするココアを飲みながら鼻の下についた茶色のおヒゲを元気に揺らして蓮子が語ることには以下の通りである。京都の寺で修行をする傍ら密造酒販売をしていた外道僧侶が、あるとき仏の天命を受けて画期的なレシピを制作。それにしたがって調査された超希少酒を偽電気ブランと呼ぶらしい。そのレシピは長いこと僧侶のもとで門外不出とされていた。偽電気ブランの味がこの世のものとは思えないほど素晴らしかったので、彼は密売で相当の資産を作ったようだ。

ところが人間万事塞翁が馬。密売で儲けた金を使って寺を増築しようと、市役所の役人を入れて床

2 天から授かったレシピなので、この世のものと思えないというも領ける。

下の強度検査などをさせたところ、地下室で作っていたブロックが見つかってしまう。詰め甘い僧侶はあえなく御用。京都中の酒通さけつうが集まって、残された寺をひっくり返さんほどの大騒ぎでレシビ捜索が行われたのだが、調合法が書かれた紙は三千世界のどこへやら。一ヶ月後に「発見は絶望的」と捜索が断念されたときには、京の全酒場さかばが喪に服し、アルコール度数10%以上の酒の販売を自粛したらしい。

「その話だと、レシビは失われてしまったのでしょうか？ そんなバチアタリなお酒が、どうしてまだ京都に存在しているの？」と私は呆れながらも蓮子に聞いた。こんな馬鹿げた話があるはずがない。どうせ酒を飲んで自我を失った酔っぱらいが口からでまかせをペラペラしゃべったのを、そこに居合わせた夢見がちな少女が小耳に挟み、あることないこと付け加えて広めまわったのだろう。こんなフザけた話を信じちやうあどけない少女も存在するのだし、そんな少女に連れ回されて厄介な目を見る別の少女もいるのだから、ウソでオオゲサでマギラワシイことを広めるのは本当に、勘弁していただきたい。

「それがレシビは継承されていたのよ！ どうやらその僧侶はたった一人にだけ製法を教えていたらしいの。彼が貧乏だったところに作った借金の担保に取られたという話もあるわ。僧侶が捕まっただけでなく、その人物が『京の五竿ごせう』に偽電気ブランを振舞って、彼の製法が本物である事を証明

したのよ。それで晴れて偽電気ブランがこの世に復活したってわけ。」

なんだろうゴソウって。どんな字を書くのだろうか。⁴ またお坊さんの話なのかな。⁵

蓮子の使った言葉が理解できなくてぼうつとしてしていると、急に蓮子はガタツと身を乗り出してきて、「復活したと言っても、どこでも飲めるわけじゃないわ。製法を知っている人物ってのが変わり者らしくって、電車を屋台に改造して夜の路地裏に現れるらしいの。そこで」

「路地裏で張り込みをして電車がやってくるのを待つ？ 蓮子、あなた本気で大丈夫？ なにか悩みがあつて、それで不安定になつているなら私に言つて頂戴。私に言えないような悩みならば、大学には生徒相談室というものがあるわ。職員さんが、滅多に来ることのない相談者さんを今か今かと待ちかまえているから、きつとどんな話でも話だけは聞いてもらえと思うわよ？」

「むーっ、メリー、ノリ悪い！ もういいわよ！ 私だけで偽電気ブランを味わつて、メリーには私の素晴らしい体験談を着^さに安^{やす}い発泡酒を啜^{すす}つてもらうから。むー。」

蓮子が椅子の背に持たれかかつてむーむー唸^{うな}っている隙に、私は蓮子に押しやられていた資料を広げ直して作業を再開した。今日中に心理学的座標変換に関するレポートを書いてしまえば、今週末は自分の好きな本をゆつくり読むことができる。悪いけど、充実したウィークエンドを蓮子の妄言につきあつて潰すつもりはさらさらない。

4 あとで調べたら、箆^{ざる}は音読みで「ソウ」と読むらしい。分かりにくい名前をつけたものだ。

5 私は完全に「五僧^{ごそう}」だと思つてた。

蓮子が来るまで進めていたレポートの続きをやらうとペンを取った。すると、机の上に紙くすが、カサツ、と飛んできた。

なんだろうと思つて頭をあげると、飛んできた方向では一人の人が、机に会計を置いてまさに店を出ようとしていたところだった。長い外套を着て山高帽をかぶり、長靴のようなブーツを履いてステッキを振りながら、その人物は出口の扉に向かってゆらゆらと歩いていく。

きつとこの紙はあの人がイタズラで投げたのだろう。おかしな人もいるものだ。服装も本から出てきたイギリス紳士みたいにヘンだし、かまつてほしいのかもしれない。そういう人にはかかわらないほうが一番。イタズラをした相手を喜ばせることもないし、トラブルにでも巻き込まれたら大変だわ。

そう思つて紙くすを片付けようとしたとき、私は不自然なことに気づいた。紙くすはきつく丸められていたのではなく、放つておけば自然と広がつてしまふそうなくらいに軽く丸められているのだ。ナプキンを、たとえば口を拭くのに使つてから捨てたとしたら、最低でも一たみ分ぐらいはちゃんと折るはずだ。そうしないと丸めたときに汚れた部分が外側にきてしまふかもしれないから。

これはゴミを捨てたんじゃない。私はそう直感して、丸まつた紙を広げた。中には走り書きされた文字で、

諸君 偽電気ブランは 存在する 廿弐時にじゅうに みゅーずにて

「蓮子！」

私は叫んで立ち上がった。店内の視線が集中するのが分かる。かまうものか。この紙を投げつけてきた人物はちょうど店から出たところだ。机をはねのけて出口に走り、くたびれた扉を叩き開けて表に出た。

「待ってください！ 待つ、て……？」

私は大声で、喫茶店から出たばかりの人を呼び止めようとした。しかし、すぐそこにいるはずの人物からの返答は、無かった。まるで境界の中にも消えてしまったかのように、その姿は通りのどこを探しても見当たらなかったのである。

「何よ、急に叫んで奇行に走って。エウレーカ的な何か？」

蓮子はいつの間にか扉のところまで来ていて、腰に手を当ててにやにやししながら私を見ていた。人をバカにするときに彼女がよくやるポーズだ。でも、蓮子の憎たらしい冷笑れいしょうを見ても、私の心の高鳴りが収まることはなかった。

現代の京都に、こんな演出をする人がまだ残っていたなんて！ 行き着く先が鬼か蛇か、それはまだ分からないが、偽電気ブラン、信じてみる価値がありそうだ！

私が感動と決意に浸っていると、薄暗い喫茶店の中からニュツと手が伸びてきて、蓮子の右肩をガシツと掴んだ。

「お客様方、コーヒーの飲み逃げはご遠慮ください。」

ウェイターさんの左手には、キラリと銀色に輝くフォークが。やさしそうな彼女の微笑が、とてもとても怖かった。

○

本当のところメリーは不思議なものとか未知のものとかが大好きなのです。

それなのに、人目やら世間体やらを気にして、自分は「ほかのみんな」と同じ、希代けったいなモノなんかには興味がない一般人を装っているのです。

私からみればメリーは、神様から与えられた大切な「若さ」を流し台の三角コーナーで腐らせたあげくに高瀬川に流して得意になっている大馬鹿者です。

しかし、彼女は幸運です。私という素晴らしいパートナーに出会えたのですから。私はメリーに不思議を提供してあげて、メリーが人生に退屈して大文字山に身を隠してしまったりしないようにしてあげているのです。なんて友人思いな女の子なのでしょう！

つまり、私が不思議を追い求めるのは、自分の探究心というよりは、むしろメリーのためなのです。決して「妖怪・霊魂・不可思議・人外などを捕まえて一緒にお酒が飲めたら面白そう！」などという不

純な動機⁶による行動ではないのです。よく勘違いされるのですが、これは本当のことです。何年経っても鴨川の流れが変わらないのと同じくらいにまちがいのないことです。

そういうことで5月のある夜、メリーの燃えさかる好奇心に薪をくべるため、私はメリーと一緒に喫茶「みゆうず」へと足を運びました。

喫茶「みゆうず」は旧「新京極」の近く、四条河原町の交差点を少し上ったところにあります。名前から手の雑菌をことごとく洗い流してしまいそうな清潔感が感じられますが、実際のところは町の寂れた喫茶店の一つでした。

喫茶店がこんな夜遅くに開いているはずはないと思われるかもしれませんが、このお店は夜になるとムーディーな西洋居酒屋に変身するのです。私たちが重い木の扉をぎぎいつ、と開くと、中からは甘いアルコールの薫りが漂ってきました。学生が減多に経験することのない、オトナの薫りです。

「いざ来てみたは良いけれど」と言いながらメリーはカウンターに陣取って、立てかけられるように置かれていたメニューを広げました。

「手紙の主は本当に来るのかしら。」

「わかりません。」と私は答えました。「顔は憶えていますか？」と聞いてから、私はメニューに目を落しました。当然のごとく「偽電気ブラン」などという文字はありません。

⁶ メリーは多分こういう動機を持っているのですが、私は違います。

⁷ 私は上品なので、誰に対しても敬語を使います。本当です信じてください。

「憶えてないわ。」メリーは首を振って、ぶつきらぼうに答えました。「私が見たのは背中だけだから。」注文を取りに来たおばあさんに、メリーは「カルーアミルク」などという凡庸なカクテルを注文しました。普通の大学生を必死に演じようとしているのです。そんな偽りに何の価値があるのでしょうか？ たとえ突飛であつても、自分の飲みたいものを飲めばいいのに。

メニユーの隅の方にあつた「真澄」という日本酒を私が注文すると「え！ 日本酒なんてあつたの！ ずるいー言ってくればいいのにー。」などと言つて私を批難したあげく、ずうずうしくも「私のと交換してよ」と言つてきました。自分で頼めばいいのにと思いましたが、友人の言うことですから断れません。私は快くお酒を交換してあげました。

メリーはとても美味しそうに日本酒を飲みます。そんなメリーの姿を見ると、日頃のメリーの奇行も、お酒が関わりと後先を考えられなくなるメリーの悪癖も、とてもかわいらしいものに見えてくるのです。メリーが喉をこくん、こくん、と鳴らしてお酒を飲むのをじつと眺めていると、まるで自分がお酒を飲んでいるかのように顔が熱くなつてしまします。ちつともお酒を飲んでいないうちから顔を紅くするとメリーにからかわれるので、先手を打つために「メリー、顔が紅いですよ。」と言おうとしたとき、喫茶店のドアがぎいっ……と開いて、「やあやあ君たち、また会ったね。」と声がしました。私たちは揃つて出口の方を向きました。

そこには山高帽のイギリス紳士が……と思いきや、現れたのは浴衣姿の男性でした。浴衣姿でムー

デュー喫茶店にくるといふ時点で常人ではないことは明らかです。この男性はとても面白い顔をしていて、なすびのように伸びた顎が印象的です。工学部の小津さんは、幽霊と妖怪を足して2で割らずに3をかけたみたいなの顔をしているのですが、彼となすびさんとはいい勝負だな、と私は一人うなずきました。

なすびさんは私の右隣のカウンターに座り、「君たちだね、『偽電気ブラン』の話をしていたのは。」と話を始めました。

「はい、ええと……」と言いよどむと、なすびさんは「私は樋口だ。天狗をやっている。」と自己を紹介しました。言うに事欠いて天狗とは！ 私の胸もメリーの胸も否が応にも高鳴ります。

「はじめまして、えつと、天狗さん。私は宇佐見蓮子です。秘封倶楽部をやっております。」と私も負けずと自己紹介しました。メリーも「同じく秘封倶楽部のマエリベリー・ハーンです。」と当たり前障りのない自己紹介をしました。

「先程は洋風な服を着ていたと記憶していますが、なぜ着替えを？」

私は不思議になつて聞きました。しかし、天狗さんは首を横にふり話そうとはしませんでした。

「世間話などしても益はない。さつそく本題に入ろう。」天狗さんは先を急ぎました。「偽電気ブランという酒は確かに存在する。ただし少々入手が難しい。」

「私たちはいかなる苦難をも乗り越え偽電気ブランを手に入れる所存です。」と私はシャイなメリーの

気持ちを代弁しました。

「うむ。その心意気だ。ならば教えよう。現在、京都の偽電気ブランはある老人が占有している。彼は名を李白りはくという。」

もしやその方は、天のレシピを入手して偽電気ブランを再興したという方ではないでしょうか。

「李白さん。高尚なお名前です。」

「そうだろう。だがその実は吝嗇家りんしょくかだ。」天狗さんはそう言って口を横一文字に結びました。それは何か思うところがあるような顔に見え、私は会ったこともない李白翁おうちんのことが恐ろしくなりました。

「もつとも、夜になると人が変わったように大盤振る舞いを始めるのだが。」

「闇は人を変えます。」と私は大きくうなずきました。

天狗さんはここでコホン、と咳払いをし、私たちの注意を引きつけました。私は天狗さんの目をじつと見つめるより他になにもできなくなりました。

「李白翁は毎夜飲み比べの相手を探している。『京の五筭ごそう』には入っていないものの、彼は彼ですさまじい酒豪だ。ここいらの酒自慢は全て敗れ、最近では挑戦する者も絶えた。」

そこまで言うとな狗さんは足を組み替え、一段と声を落として言いました。

「彼と飲み比べをやつて勝てば、好きなだけ偽電気ブランが味わえる。どうだね、君たち、やつてみないか。」

「艱難辛苦かんなんしんくを乗り越えようと先ほど宣言いたしました。ぜひ挑戦させていただきます。」

私は今まで以上の力をこめて宣言しました。メリーの「言うまでもあるまい」という気迫も背中から伝わってきます。

飲み比べ！ 伝説のお酒を飲むための条件が飲み比べに勝つだけとは！ あまりに簡単な条件に、私は拍子抜けしてしまいました。ファン・デル・ワールスの力でどんな汚れでもたちまち落としてしまう幻の亀の子束子だわしを探してこいとか、三大洋の隅から隅までを旅する伝説の大王烏賊だいおういかを拾ってこいとかいう難題を出されたらどうしようかと身構えていたところに「飲み比べ」などという言葉ですから、思わず唾つばが溜まって喉をゴクリと鳴らしてしまいました。少女らしからぬ、はしたないことをしてしまつたと反省しております。

「その言や良し。」と天狗さんは満足気に言い、そしてメリーに向かって「そつちの君は……」と聞きかけたところで目を丸くして、「おや、お連れさんは？」と私に尋ねたのです。

天狗さんの驚いた表情を見て、私はメリーのほうを向ききました。カウンターのの上には日本酒が半分入ったグラスと、メリーが持つていた件のナプキンくたが置いてあり、メリー自身の姿は見当たりません。なんとということでしょう！ 彼女の姿はいつのまにやら、音も立てずに忽然と、消えてしまつていたのです！

「あれ、おかしいですね。ご不浄でしょうか。」私はすこし取り乱して、きよろきよろあたりを見回し

ました。いくら奇行が多いメリーといえども、友人が話しているときに何も言わずにお手洗いに行くような非人道的行為に及ぶ人間とは思えません。

「私はずっと彼女のほうを向いていたけれど」天狗さんは顎を私の方に向け、「彼女が席を立ったのは気づかなかったねえ。」と目を細めました。

「不思議なこともあるものです。音も立てずに消えてしまうとは。メリーに探偵の心得があつたとは知りませんでした。」思いがけぬ事態に私は動揺を隠しきれませんでした。

「ふうむ、これは、飲まれたかもしれないな。」天狗さんはなすびのような顎を手でさすり、首をかしげながら言いました。

「飲まれたとは、何にでしようか？　ダークマター生命体や五次元多様体などが考えられますが。」と私はありつただけの知識を動員して言いました。

「うんにや、そんなやわなもんじやない。」

喫茶店の照明がゆらゆらとゆれ、天井に無秩序な文様もんようを描いています。天狗さんは言いました。

「境界ズキマにさ。」

○

みゆーずという寂れた喫茶店で蓮子とお酒を飲んでいたら、天狗というよりは浮浪者に近い樋口という人物に声をかけられた。

ところが自己紹介をしたかしくないかというところで視界が揺れ始め、まだ全然飲んでないのに、と思つたら見たこともない部屋にいた。酔つ払つて医者にも連れていかれたのか。それにしても薄暗い部屋だ。

私は寝ていたソファから身を起こして、あたりを見回した。どうやら医者ではないらしい。少なくとも診察室ではない。世界一周お化けツアーで買ってきた様々なお土産を友人に配らずに禁酒法時代のアメリカのダイニングにぶちまけたように混沌とした部屋で、壁にはキミヨウな絵、隅にはイカツい置き物、床にはリッチな赤絨毯、奥には柱時計まであつて、コチ、コチ、コチ、と時を刻んでいる。おかしな感覚だつた。

この感覚は、まるで、そう、違う世界へ迷い込んだような。

境界を超えて別の世界へ行つたときのような。

いつか幻想でもこんな紅い洋館を見たつけ、なんて思っている、部屋の隅にあつた螺旋階段が、きしつ、と唸つて、それからまたきしつ、きしつ、きしつ………と唸つて、上の階からまず足が見えて、

⁸ 蓮子はメニユーの隅にあつた日本酒を目ざとく見つけた。私が「ちよつと飲ませてよ」と言つてもぶーぶー言つてなかなか飲ませてくれない。お酒が関わるとがめつくになるのが蓮子の悪い癖だ。

タオルが見えて、湯気が見えて、最後には恰幅かつぶくのいいお爺さんが見えた。

「君は……」

お爺さんはひどい格好をしていた。いや、私も家ではそういう格好をしないこともないけど。脱衣所で体を拭くのはめんどうだから軽く水気をとったあとは部屋で拭くこともあるけど。

「ふむ……。」

お爺さんはタオルで体を拭きながら全裸で階段を降りてきたのだ。

「ああ、あのう！ これはえつと、ごめんなさいお邪魔しております！ う、あ、お酒を飲んでいたらいつのまにかここに、ああ、よつぱらつたわけではなくて！」

慌てて変な言い訳をしました。私がおどおどしていると、お爺さんは私にゆつくりと近づいた。前を隠そうともせずに。

「ソファの上に、寝ていたのだね？」

「は、はい。」

お爺さんはタオルを首からかけ、手を腰に当てて天井を見た。考え事をしているようだ。何も知らない第三者が見れば、少女を椅子に座らせて自分の局部を仁王立ちで見せつける超変態ちやうへんたいに見えるだろう。いや、第三者である私から見ても超変態だ。もしかしたら自分でも超変態を自覚しているかもしれない。なんだこれ。冷静になつてみると怖い状況だ。もしかして私は睡眠薬を盛られてこの老人に

身売りされたのではないか。これがいわゆる「貞操の危機」というやつか。実際に直面するとあまり実感がわかないものだなあ。

私が感慨に浸っている間も、老人はふむう、むふう、と言いながら考え事をしている。ヒワイなことを考えているのだろうか。それにしてもはサイズが小さいままで。

「お嬢さんはいままで、いつのまにか別の場所にいたという経験はないかい。今回みたいに。」

天井を見上げていた全裸爺は私に向き直ってそう言った。私は咄嗟に「い、いえ、初めてです。」と答えた。異常性を自ら露呈することもあるまい。アブノーマルが好きないんせい老人である可能性もある。しかし老人は「うむ。そう言っておくのがよかろう。素早く的確な判断だ。お嬢さん、頭がいいね。」と私の嘘を見ぬいたようだった。褒められても嘘は見破られているのだから嬉しくもなるともない。

不服に思っていると、お爺さんがずっと私に近づいた。私はソファに座っていて、お爺さんは立っている。高低差。全裸。私は限界を感じて「ひあつ！」と素頓狂な声をあげて飛び退いてしまった。

老人はようやく自分の状況に気づいたふうで、「おっと、すまないすまない。貧相なものを見せつけてしまったね。」と言いながら首にかけていたタオルを下半身に巻きつけた。タオルを腰に固定しようとしながら「ズボンでなければ取る価値がない」などとつぶやいたような気がする。私がズボンを履いていたら凶行に及んでいたと言うのか。空恐ろしい。ボーイッシュな蓮子と被らないように常にス

カートを履いている自分の英断に感謝した。

「お嬢さんは何か特別のようだね。」と老人は言つて、「失礼、儂が李白だ。」と名乗つた。名乗るのが遅すぎると思つたが、名乗られたら名乗り返すのが礼儀と教えられている私は感情をぐつと抑えて、「私はマエリベリー・ハーンといいます。」と答えた。

李白と名乗つたその老人は、まるで何もかも知つたような顔をして、「ふむ、そうか。」と頷うなずいた。さつきも私の嘘を見ぬいたし、いつたいこの老人は何を知っているのだろう。

疑いの目を向ける私のことは一向に気にかける様子もなく、李白さんはふくよかな顔をむにーつと横に引き伸ばすようにして笑つて、「儂の宴会場に断りなく入り込んだのはお嬢さんが初めてだ。本来ならば偽電気ブランをふるまつてその快挙をもてなすところだが、残念なことに今晚は先約がある。少すくしく待つていてはくださらぬか。」と言つて会釈をした。

自然に出てきたキーワードを、私は聞き逃さなかつた。今晚の秘封倶楽部の目標。この老人に棒状のモノを突きつけられることになつた原因。

「に、偽電気ブランとおっしゃいましたか？」

「ほう、お嬢さん、偽電気ブランを知つておるか。」李白さんは目を丸くして答えた。

「はい。今日はそれを探しに街へ出たんです。」

私はそう言つて、喫茶店で投げつけられたメモを李白さんに見せようとしたが、ポケットの中をい

くら探しても見つからなかった。どうやらみゆうずに置いてきてしまったようだ。あのナプキンによる伝言は、私の中ではトツプレベルの「粹」^{いぎ}だったので、できれば保存しておきたかったのだけれど。メモを探して私がおももどと体を動かしている間も、李白さんはふむ、ふむ、と唸って、「なるほど。だからここに誘われたのだ。」と言って私を見た。誘われた、ということは、やはり私は誰かによつてこの場所へと連れてこられたというのか。そうだとしたら、いったい誰に、どうやって？

「探していたのは、一人で？」

李白さんにそう言われて、私は蓮子のことを思い出した。「いえ、その、友人と。」と答えると、「それでは、そのお友だちはどこだね。」と問われた。

「みゆうずという喫茶店でお酒を飲んでいたので。天狗という方に呼び出されて。それ以降は覚えていません。」

聞かれるまで忘れていたけど、蓮子は大丈夫だろうか。あの子はひとりになると碌^{ろく}なことをしない。私を探すとか言つて「メリーさんいませんかー」とか叫びながら京都市中をかけずり回るなんてことも平気でやってのけそう。そうして次の朝には私は京都市中の人気者になっているのだ。そういえば蓮子に会つてまもない頃、私の学科まで「名前を発音しにくいあの人」とか言つて私を探しに来たことがあつたつけ。それ以来、私のあだ名はファンタジー小説の悪役⁹みたいになつてしまった。

⁹ 古典ファンタジー小説の登場人物名を一字変えて Vordemort^{らしい}。vox（声）で発音しにくい、という意味にかけているみたいだが、正直あまりうまくないと思う。なにより人を悪役みたいと呼ぶな。

私がそうやって蓮子のことを（というより、蓮子がしでかしそうな悪行のことを）心配していると、李白さんは「お嬢さん、天狗にも会ったか。これも何かの縁。」と何かを納得したみたいに頷いて、螺旋階段へと私を促すようなしぐさをした。

「お友だちが心配しているだろう。探しに行かれよ。」

私のことを心配するような繊細な心が蓮子にあるとは思えないし、今晚の最大目標が目と鼻の先にあるというのにみすみす逃すのは勿体無い。少なくとも偽電気ブランだけは確保しよう。こういうときはずうずうしくなるのも大切だと思つて「いえ、その前に、偽電気ブランを」と言いかけたが、李白さんは私を制して、「儂は北の先斗町ほんとうちやうへゆつくりと向かう。お友だちも先斗町にいるのだろう。すぐにもた会える。偽電気ブランはそのときにご馳走しよう。」と言つた。

それに続けて李白さんは「君はきつと境界スキヤに呑まれたのだ。あれは強い意志を持つ人を誘いざなう。私も……」と言いかけて口をつぐみ、「いや、こんな話よりも、今はお友だちを探るのが先だ。さ、早く行きなさい。きつとここには戻つて来られる。」と強く私を促した。

その言葉には有無を言わせぬ力があつた。それに、夜の町に蓮子一人で放つておくわけにもいくまい。ちよつとやそつとのチンピラに絡まれた程度ではあの子なら得意の口先で難かなく躲かわしそうだし、もしかしたら抜刀している浪人軍団と対峙ひきあしても飄々ひょうひょうと切り抜けてしまふそうだが、それでも女の子、ちよつとは心配だ。

「わかりました。それではまた、近いうちに。」

お辞儀をして螺旋階段に足をかけた。早く蓮子を見つけてここに戻り、李白さんが持っているという「偽電気ブラン」とやらをたんまりとご馳走してもらおう。李白さんはそんな心を知つてか、うむ、と頷いた。

「そうだ。」

螺旋階段を数段上ったところで李白さんが思い出したように声をあげた。

「この上は銭湯になっておる。全てが終わつたあとに入つたらいいだろう。なんなら背中を流してあげよう。」

やはり変態だったか、と心のなかで思いつつ、「遠慮しておきます。」と答えておいた。

○

「みゆーず」のトイレから地下倉庫まで探してもメリーはいませんでしたので、私は夜の先斗町ほんぢやうを走りまわつて彼女を探しました。天狗さんが言うように「境界」スキマに飲み込まれてしまつたのだとしたら、先斗町にメリーがいるとは限りません。しかし、メリーの偽電気ブランに対する思いが強いのなら、境界スキマは必ず先斗町に開くだろう、と天狗さんが言いましたので、メリーのお酒に対する執着心を知っている私は、メリーを探しに先斗町じゆうをめぐることにしたのです。

「用事を思い出した。先斗町を巡っていれば今晩中には会える。」と言うと天狗さんは喫茶店をあとにしてしまいました。残念ながらメリー探しには参加されませんでした。年端もいかぬ女の子が勝手知らぬ町を走りまわっては、ミイラ取りがミイラになり、スフィンクスハンターがスフィンクスになり、ピラミッド大工がピラミッドを形成して怪電波を宇宙へとたれながすようになる恐れもあるので大変キケンです。しかし先約とあつては仕方がありません。私は泣く泣く天狗さんと別れることになりました。メリーが残した日本酒をぐいっと飲み干して、私は寂しさを誤魔化しました。

「あの子は特別のようだからね。」去り際に天狗さんは言いました。メリーだけ天狗さんにほめられるなんて、と悔しくなり、私は軽く地団駄を踏みました。しかし、「特別というのはいいい意味とは限らない」と思いなおし、メリー探しを再開したのです。

幽霊や妖怪などの不思議が絵空事でないのを知らしめるかのように、先斗町は独特の空気で私を包みます。夜の闇に妖しく光る赤提灯。情緒をぶち壊そうとして、逆に新たな興趣を生み出しているネオンサイン。混ざりあうそれらの光が作る陰の中では、空きビンや紙クズなどに混じって、人を誘う妖精たちが私に向かって手招きをしているようでした。

手当たりしだいにお店のドアを開け、私はメリーがいなか尋ねてまわりました。

夜の先斗町は幻想の空間です。ミラーボール輝くただっぴろいダンス会場があるかと思えば、15帖ぐらいのスペースにステージと客席を放りこんだようなジャズバーがあり、表の木屋町の通りには仕

事帰りの方々や学生の方々が行き交って、ぬえええん、などという正体不明の声も聞こえます。空を見上げるとかすかに星が見えて、「23時5分」と私は独りごちました。

たくさんのお店を見て回りましたがメリーは見当たりません。行く店ごとにお客さんに話しかけてメリーの居所を聞き、そのついでに彼や彼女が飲んでいるアルコールを少量拝借していったのですが、塵も積もればなんとやらで、何軒もまわっているうちにだんだんと心地良くなって「メリーメリー！」と大声で叫びながら先斗町を走りました。

走りまわるうちに、私たちと同じ大学の一団に出会いました。彼らは「詭弁論部」というサークルに所属していて、今日はイギリスへ留学するOBの送別会だということでした。宴はまだ始まったばかりのようで、皆まだそれほど酔った様子もなく談笑や議論に花を咲かせています。私もその歓談に混じって、回ってきた三鞭酒シヤンペンを遠慮しつつも少量いただきました。

「ねえ君」と、それまで会話の中心にあつた男性が私に声をかけてきました。「見たことないが幽霊部員か」と問われたので、私はメリーのことを話して財布の中に入れてあつた写真を見せました。男性は「その人のことは見てないなあ」と言う、「そんなことより」と言つて自分の話を強引に進めてきました。

「自分が惚れた男と結婚するのと、惚れてない男と結婚するのとじゃあ、惚れてない男と結婚する方がいいよね」

何を馬鹿げたことを、と思いましたが、本人は至極真面目しごくに言っているようなのです。こんなことを真顔で言えるような人間は呆れを通り越して尊敬に値するな、と思い、私は彼の話聞いてみることにしました。

彼の論理の概略はこうです。惚れると正常な判断が出来なくなる。結婚は一生を左右する重大な選択だから、正常な思考を持った状態で判断すべきだ。しかるに惚れていない男と結婚したほうが合理的である。

彼の詭弁を聞いているうちに、私は腹が立つてきました。何が合理でしょう、何が論理でしょう！彼は重大なことを見逃しています。それは、男女の愛という現象そのもの、否、結婚という男女間の契約そのものが、動物的・非論理的・非理性的なものであるということです。彼の稚拙な論理を聞いて居ても立つてもいられなくなつた私は、彼の前で大見得おおみえを切る決意をしました。

「結婚をする際には合理的な判断が必要であるという点には同意します。しかし男女の間で考えている間は、いつまでたつても合理的に判断を下すことは不可能です。なぜなら、人間とは遺伝子の段階から『男はいかなる女にも惚れ、女はいかなる男にも惚れる』ようにプログラムされているからです。種の存続のためにそれは必要なことだったので。ところが、現代においてはこのプログラムが私たちの理性を邪魔します。すなわち、『男性はいかなる女性の前でも合理的判断能力を阻害されるし、女性が男性を前にしてもまた然り』ということ。『惚れていない相手』とはいえそれは『惚れている

相手』と比較すれば惚れていないだけで、この世界に『惚れていない相手』しか相手がいない場合はその相手に惚れる以外にはありえないのです。」

私に議論をしかけてきた相手が、ぐっ、と揺らぎました。私が多少大きな声で論駁ろんぱくしてしまつたため、私たち二人の周りには何人かの観客が集まつてきて、「極論だ」「いや、面白い、もつとやれ」などと野次やじを飛ばしてきます。私は他人に見られると興奮してくるタイプなので、さらに議論を進めることにしました。

「他者との関係の中に存在する人間が、合理的な判断を下せるのはいかなるときでしょうか。それは同性といるときで、かつそのときだけです。また、結婚の判断は合理的に下されるべきであるという点には議論の余地はありません。以上から導かれる結論はただ一つ。『結婚は同性とすべきなのです。』」議論相手とギヤラリーの両方の動揺が伝わってきます。こんな明白な結論に気づくことなく今まで詭弁論部員をやっていたなんて、同じ大学の学生として呆れます。デートをやったら明らかに秘封倶楽部の勝利でしょう。

「そ、それじゃあ君は同性愛を肯定するのか。」と彼は私に言いました。

「無論です。むしろ同性愛しか肯定しません。」と私は結論を繰り返しました。

「ぐぬぬ」

10 変な意味ではありません。

相手の男は持っていたコップのお酒をグイッと飲み干すと、天を仰ぐその体勢のまま、大粒の涙をぼろ、ぼろ、と零しはじめました。論破されてしまったことがそんなに悔しかったのかと思ひ励まそうとすると、急に大声で「ナオコさんっ！ 君の為になら僕は体の一部を切除しても構わないっ！ それなのに、それなのに……っ！」と叫んで、「もう飲まずにはいられるか」とギャラリーの向こうにある酒瓶群へと突進していききました。見た目によらない気性の激しい人のようです。そんな彼の勢いに突き飛ばされた女性がこちらへ飛んできて、私の目の前に倒れこみました。「大丈夫ですか？」と私は彼女に手を貸してあげました。「ありがとう、あなた名前は？」と聞かれたので答えると、女性は起き上がるやいなや「蓮子ちゃん、あなたには天賦の詭弁の才能があるわ。ぜひ私たち詭弁論部に入つて人々を喝破する旅に出ましよう！」と言つて私を詭弁論部に勧誘してきたのです。転んでもただでは起きないとはこのことです。私は近くの窓をガラリと開けて、

「お誘いください嬉しい限り。いやはやしかし残念無念、既に倶楽部に入つていれば、あなたと共に歩めませぬ。」

と窓を背にして少々演劇ふうに口上を述べました。「よっ！ 詭弁女王！」「蓮子！」とどこからともなく合いの手が入ります。合いの手を入れてくれるのは嬉しいのですが、いきなり呼び捨てとは少なれなれしいな、と思ひました。まあなれなれしい人は嫌いではありません。

「なんの倶楽部に所属しているのですか？」女性は私に問いかけました。一番聞いて欲しかった質問

です。私たちの活動の宣伝にもなります。私は語気を強めて言い放ちました。

「聞けやその名も秘封倶楽部！」

台詞がキマったら間髪を入れずにこの場を去らなければなりません。私は勢いをつけて窓から飛び降りました。

二階からのジャンプは、正直、怖かったです。

○

李白さんの電車の屋上には池があった。

打ち捨てられた公家くげの屋敷から庭園だけを切り抜いて移植したかのような不自然さで、池・竹林・煙突などが同居していた。

電車は橋の下に停まっている。橋の欄干を乗り越えて屋上を離れると、それを合図にゆつくりと電車は動き出した。

「ここはどこわたしはメリー」と思つて通りの名前を見てみると「松原通」とある。「みゆーず」のある四条河原町まではちよつと距離がありそうだ。急がないと蓮子が取り返しあせりのつかない悪行あくぎょうに走りだすかもしれない。私は鴨川の賑やかな光景を背に、木屋町通を北へと走りだした。

木屋町通は不思議な通りである。築百年はあるような瓦葺かわらけの住宅があるかと思えば、できて間もな

い大きなビルがその隣に建っている。高瀬川が左手に流れて、川岸には桜も植わっていた。あいにく葉桜だったが、来年の花見シーズンには蓮子とこんなところを歩いてみるのも楽しいかもな、とか考えていた。

並木と街灯が植わった通りを北へ北へと走り続けて、ようやく四条河原町の交差点に着いた。もの静かな木屋町通とはうってかわって、夜だというのに、いや夜だからこそ、四条河原町は人でごった返していた。「みゅーず」の前で一度立ち止まって、私は呼吸を落ち着かせた。時計を見ると、深夜を少しまわったところだ。

蓮子がいないか確認するために「みゅーず」の中に入るとおばあさんが注文を取りに来て、「おや、あなたさつきも来たわねえ。」と孫に話しかけるみたいな声で言った。

店内をぐるりと見渡したが、どこを見ても二人はいない。蓮子と樋口さんがどこへ行ったのかとおばあさんに聞いたら、とりあえず飲み物はと言われたので、思わず「では日本酒を」と言ってしまった。

おばあさんはカウンターから真澄を取り出してきてグラスに注ぎながら「なんだか大急ぎで出てきましたよお。あなたのこと探しに行ったんじやないのかい。」と言ってにっこりと笑った。注いでから答えるとは商売上手だ。でもまあ蓮子にもらった日本酒は途中までしか飲めなかつたし、李白さんのところから走ってきたので疲れてもいた。ここでちょっとゆっくりするのもいいかなと考えた私は、日本酒がなくなるまで「みゅーず」に留まることにした。

窓ガラスの向こうの景色は騒がしかった。携帯電話を耳に当ててしきりに頷いている男性やロボットダンスでガシガシと道を歩いている女性、グループで手をつないで一本締めで代わる儀式を執り行っている一団やふわふわと宙をただよっている巫女、まさに現代の百鬼夜行と言うにふさわしい光景が広がっている。

「こういうのも、悪くないじゃない」と日本酒を片手に私は独りごちた。夜は蓮子に連れまわされて人気のないところにいることが多く、華やかなところに来たことはあまり無かったのだ。

私たち秘封倶楽部が探す「幻想」とは現実の中にあるのではなからうか。むしろ現実が幻想なのかもしれない。こうして夜にふらふら町を歩くのも、考えてみれば幻のようなものだ。朝がくれば消えてしまう月や星のように、いつか消えてしまう人間として私たちが存在している以上、この世界に生きていくということ自体が、霧のようにもやもやした掴みどころのないことのように思われた。

「あなた、お友だちはいいのかい。」とおばあさんが話しかけてきた。時計を見ると、ここに来てから30分くらい経っていた。そんなにゆっくりしていたとは！ 残り少ない日本酒をぐいっと飲み干して会計を済ませ、おばあさんにお礼を言っただけで店を出た。出るときにおばあさんが「またおいで。」と言ってくれた。

「さてと、蓮子を探すんだっけか」私は木屋町通を北へ歩き始めた。

蓮子だったらどうやって私を探さるうか、きつと店から店へと渡り歩いて、会う人会う人に「メ

リーしりませんか」と言つて写真でも見せているだろう。そういうことを恥ずかしげもなくてできるのが蓮子だ。

「ま、そこが可愛いんだけど。」

それでは私はどうやってあの子を探そう。蓮子の写真は持っているけれども、まさか私も蓮子がやるような恥ずかしいことをするわけにはいくまい。道を歩いていたら向こうからパンを啜えた蓮子が走ってくる御都合主義的展開も無いだろう。夜の先斗町に広がる提灯ちようちんや街灯がいでんのダンスを見ながら最終的には「適当に歩いて会えたら会えたでいいや」などと投げやりな考えに落ち着こうとしたとき、横にある料亭の二階の窓がガラリと開いて、飽きるほど聞き覚えのある声があった。

「お誘いください嬉しい限り。いやはやしかし残念無念、既に倶楽部に入つていれば、あなたと共に歩めませぬ。」

「蓮子！」

開いた窓の中を見ると蓮子の後ろ姿がある。しかし蓮子は完全に自分の世界に入つてしまつていて、こちらに気づく気配がない。大事なところで蓮子は鈍いんだよな、と思ひながら、私は急いでその料亭の二階を目指した。後ろでドサツと音がしたが、その時は気にも留めなかった。

セリフがキマって、かつこよく窓から飛び降りたはいいのですが、着地で失敗して地面に顔を打ちつけてしまいました。近くにメリーがいたら指をさして笑うでしょう。いなくて本当によかったと思います。

バツの悪い思いをしながらも、私はメリー搜索を再開しました。詭弁論部の方々と話してかなり時間をくってしまったので私は焦っていました。このままだと、せつかくお酒を探しに来たのにメリーを探すだけで夜が明けてしまいます。世界中の不思議を探求する秘封倶楽部の名にかけて、そんなことは許されません。私は服の汚れをばつばつと払うと、再び夜の先斗町を走り出しました。

何件ものバーを回って、数えきれないほどの居酒屋に乗り込んで、私はメリーを探しました。行く先々で写真を見せ、お酒があつたら少しいただぎ、人生を語ったり語られたりしました。

夜の街の面白さを、私は初めて知りました。いつもいつも夜になるとメリーを連れて不思議探索に行っていたので、こういった華やかな世界に触れる機会が今まで無かつたのです。先斗町が持つオトナな雰囲気を押しまけて、メリーを探していることすら忘れてしまいそうでした。

店の中でも、外でも、さまざまな人物が、今宵は無礼講とばかりに往来しています。耳たぶからジャラジャラとアクセサリーをぶら下げている女性がいます。上下不揃いな洋服を着て、暗い顔をした男性に引きずられながら困惑している人がいます。建物の間の小さなスキマからは、ときどき猫が顔を出して「にゃあ」と愛嬌よく鳴きます。伏見稻荷から狐様が京阪に乗って宴会に来ていてもおかしく

ありません。こんな街をメリーと歩いてみたいな、と思いました。

いくつめのお店だったでしょう。店のマスターと「京都の学生は平安時代の、東京の学生は明治時代の服装をするべき」論を交わしていたとき、表がにわかに騒がしくなり、たいへん賑やかな一行が店内に入ってきました。

「あつ、天狗さん」

私はここで天狗さんと二度目の出会いを果たしたのです。

「おお、君か。お友だちは見つかったかい。道を下ったところの座敷にいたのだが」

天狗さんは私に言いました。私は「あつ、そういえば、いいえ、まだ見つかっていません。会ったのですか。」と尋ねました。¹¹まさか天狗さんのほうが先にメリーを見つけることになろうとは。地の利がこれほどまでに有力に働くものかと私は感嘆しました。

「ああ会った。まあまた見つかるだろう。」

そう言う天狗さんは目を細めてにんまりすると、

「どうだ、ちようど我々は盛大にやっていたところだ。君も一緒しないかい。」

¹¹メリーのことを忘れていたわけではないのです。しかし、夜の先斗町という不慣れた土地を、少女が一人、人探しをしながら歩きまわるというのは大変危険です。そこで私は「まずは先斗町の構造を知り、次にこの街の人々と同盟を結び、それから彼らの案内のもとメリーを探そう」という戦略に基づいて行動することにしたのです。今はこの計画のステップ2、すなわち『同盟を結ぶ』を実行していたところでした。お酒を摂取しすぎてメリーを忘れていたなんてことは、聡明な秘封倶楽部の私にはありえないことです。

という提案をしました。賑やかな方々の中に入って街を歩けば、その喧騒に誘われてメリーが路地裏からひよっこり顔を出すかもしれせん。私は一言なく同意して、天狗さんたちご一行に加わり夜の街を我が物顔に闊歩しました。

天狗さんは自称に違わず天狗でした。

彼は口から鯉のぼりを出し、耳から招き猫を出し、さも当然のように宙を舞い、そしてちびりとお酒を呑んではケラケラと笑うのでした。我々は彼の超人的芸当に口をポカンと開けるしかなく、その開いた口で大いにお酒を呑み、天狗さんに合わせてケラケラケラケラ笑いました。夜の幻想が現実となつてそこにありました。

天狗さんのご一行には羽貫さんという酒豪の女性がいきました。彼女は台所の流しのようにお酒を呑み、ひと通り飲むと他人の顔をベロンベロンに舐めまわして、それからまたお酒に戻るのでした。もちろん私も彼女の舌の洗礼を受けました。

「このおなごはうみやあのおー！」

羽貫さんのざらざらした舌が頬を舐める感覚は、不思議と不快ではありませんでした。きっと彼女は「キモチイイ舐めまわしのツボ」を知っているのでしょう。メリーの舌に匹敵する気持よさだな、と私はアルコールで虚ろになりながら思いました。

「君大丈夫かい、舐められ過ぎると毒が回るよ」

街学的腹踊りと称してお腹をピカピカ光らせながら天井に逆さに立っていた天狗さんが私に言いました。私はふらふらしながらも「慣れております」と答えました。

「慣れておるとは卑猥なおなごじや」

羽貫さんは私の顔を今までに増してペロペロと舐めまわして、「そういえば『大正ロマン』はどうしたのよおー？」と天狗さんに聞きました。どうやら日中の服装の話のようでした。天狗さんはお腹を赤く光らせて言います。

「時代は変わったのだ。何時までも過去に囚われてはいけない。」

「やあね恥ずかしながらいよいよ、キマつたのにいー。」

たしかに天狗さんが着ている浴衣は彼の雰囲気**に**びつたりマッチしていますが、『大正ロマン』な姿もちゃんと見てみたかった、と私は思いました。

「ときに諸君そろそろ河岸を変えよう、彼女のお友だちを探さねばならぬ」

そう言うとき天狗さんはお腹を青や緑に彩**って**地面にすたつと着地しました。それを合図に若いもきもめいめい酒を飲み干し、万歳などしながらぞろぞろと道に舞い戻ります。

よくよく見れば、先程お互いに詭弁を交わし合った男性が古豪**たち**に混じってくねくねと体をくねらせています。どうやらこの一行は詭弁論部の先輩後輩が多いようで、耳をそばだてるとアチラコチ

12 先程は名前を聞き忘れましたが、彼は高坂と名乗りました。

ラで詭弁の呼び声が聞こえます。私はむずむずしてしまい、大声で「詭弁道よ永遠なれ」という替え歌を歌いました。その後、私たちは一緒になつて鰻うなぎのように身体からだをくねらせて踊る「詭弁踊り」を踊ったり、深遠な詭弁の道を詠うたつた「詭弁の歌」と高らかに歌い上げました。

歩き歩いて先斗町の北の果ても近くなり、それにしたがって私たちの足取りも重くなります。先斗町が終わつてしまつたら、私たちはどこに行けばいいのでしょうか。道の先にある歌舞練場かぶれんじやうが、まるで天動説論者が思い描いた世界の果ての大滝のように思われました。

ふと前を歩いていた高坂さんが立ち止まり、「ナオコさん」とつぶやいて啞然あきとしました。その横で老齡の男性が「ありや康夫か」と憎らしげな声を口から零れさせました。

どうにも様子がおかしいので、私は隣にいた詭弁論部員の女性に事情を尋ねました。ナオコさんとは高坂さんの想い人で、康夫さんは社長さんの息子で、二人は親の承諾なしに結婚するようです。その話を聞いて彼ら・彼女らの様子を見ると、真夜中にも関わらず彼らの間には目を刺すような火花が散っているふうに感じられました。つまり修羅場というものです。

これは大変です。一触即発の事態であります。私は酔つた頭を絞りに絞つていかにこの妙な沈黙を破るべきか思索しました。

ふと、足元に紙の切れ端が落ちてきました。何かの絵の一部分のようです。何枚も何枚も落ちてく

13 皆からは「社長さん」と呼ばれていました。姓は「赤川」です。

る紙を拾つて見てみると、どうやらそれは破廉恥な春画の一部に見えました。老若男女みな「何事か」と春画に魅入っていると、頭上から大音声だいおんじやうが響き渡り、夜の先斗町を埋め尽くしました。

○

料亭の二階を見渡したが、蓮子はもうどこにもいなかった。恥ずかしさを忍んでロケットの中に入れていた写真を見せながら「この子知りませんか」と男の方に聞いたところ、「さっきまでいたけど窓から外に行っちゃった」という答えが帰ってきた。奇行の多い蓮子といえども、窓から店を出るとは予想外である。急いで後を追おうとしたのだが、「そんなことよりさあ」と腕を掴まれて「惚れた男とは結婚しないほうがいい」論をたつぷりと聞かされた。蓮子を追わなければいけないのに、私を三鞭酒さんぺんしゆで釣るなんて非道ひどい人だ。お酒を出されたら留まるより他にないじゃないか。お酒をたくさんいただきながら、私は彼の詭弁を「はい……はい……」と聞いていた。

「君は物分りのいい人だね。いいか、決して惚れた男と結婚するんじゃないぞ」

ひと通り講釈を垂れたあと、高坂と名乗つたその男性は念を押すようにそう言った。私は「はい、わかっています」と答えた。元から男と結婚する気はない。

急いで蓮子を追おう。そう決心した私が座敷から出ようとすると、外から知つた顔が現れた。

「あつ、樋口さん。」

「おお、君か。」

樋口さんは女性を二人連れて両手に花といったふうである。片方の女性はこの宴会の正式な参加者であろう男性の肩に手を回してぎやーぎやー騒いでいる。この飲み会に強引に参加しようというのか。まあ私や蓮子を引きこんでお酒を飲ませてくれた人々だ。きつと来る者は拒まないだろう。

「もうご友人には会えたかい。」

私は「いいえ」と否定して、「蓮子がどこに行つたか御存知ではありませんか」と聞いた。

「彼女には、先斗町を探すべし、と言つただけだからね」と樋口さんは顎に手をあて、「居場所はわからない。」と答えた。

「そうですか、それでは私は蓮子を探しに行きます」

私はべこりとお辞儀をして、廊下から外へ出た。¹⁴

再び木屋町通に降り立つた私は、しかし、困惑していた。もう少しで蓮子を捕まえられるところだったのに見失つてしまい、獲物は北へ行つたか南へ行つたか、はたまた東は鴨川を歩いているか西の河原町通まで出てしまったか、皆目検討が付かない。仕方がないから初心に戻ろう、と、私はもともと目指していた北に向かつて道を上りはじめた。

先斗町の夜も更けて、街並みは一層ファンタジックであつた。祭りのような騒がしきはないが、店

¹⁴ 誰かさんのように窓からなどという下品なことはしない。

の中や路上の人々から湧き出す静かな賑やかさが、この街に沈没せよと悪魔のごとく囁く。私はその雰囲気押し負けないよう、懸命に足を動かして蓮子を探した。負けたら最後までこのバーに取り込まれ、蓮子をうちやつて酒宴に興じてしまいそうであった。

川の流れに逆らうように苦しみながら歩いた。先斗町を北へ、それからまた南へ。東へ西へ。時には居酒屋に入って「蓮子をみなかったか」と店長を問い詰め、道行く人々・妖怪・妖精・猫・狐・老婆に「この子を見たら大声で叫んでくれ」と頼むなどした。蓮子を探し始めてから随分と時間が経ち、恥も外聞も体力も気力も尽きかけていたのである。そしてついに先斗町の北の外れで全てが失われた。もう如何ともしがたい。結局、端から端まで歩いても蓮子は見つからなかった。暗く沈む鴨川を見つめて私は一人で嘆いていた。シャボン玉みたいに軽くて意志薄弱な蓮子のことだ。どうせ私のことなんか忘れてどこかの飲み屋のマスターと話しこんでいるのだろう。そう考えると、私だけが真面目に蓮子を探しているのが馬鹿らしくなる。せつかく滅多に來ないところまで足を運んだのに、このまま夜明けを迎えるのはなんとも惜しい。ちよつとぐらい自分だけで楽しんでもいいかな、と、私はついに流れに押し流される寸前だった。

疲労で朦朧とする頭をあげて、私は再び道に目をやった。暗い路地の南から怪しげな男性が一人ひよこひよこ歩いてきて、料理屋の前できよろきよろと辺りを見渡してから中へ入った。私の直感が空襲警報を鳴らした。暗がりには潜んでじつと店を見ていると、通りの北から南から、男性女性が老いも若

きも人目を忍んですいすい店内に入っていく。

大きな風呂敷を持った男性が「俺で最後だ」とでも言わんばかりに通りをぐるりと見渡してから料理屋に入った。私の中の空襲警報は突撃喇叭ラッパに変わっていた。大衆の目には当てられない何かを彼らが行しようとしていることは確定的に明らか。もしかしたら、蓮子は度重なる悪行の末に彼らに捕らえられ、大座敷で独楽こまのように「あーれー」と回転している最中かもしれない。友人の危機は救わなければならない。それに正直そろそろどこかに座ってお酒でも飲みたい。私は大きく深呼吸をしてから、京料理「千歳屋」の引き戸をガラリと開けた。

中にはこの店の店主らしき人が立っていた。若い店主は私の顔をみるなり「お客様、本日は閉店でございます。」と言い放った。そんな嘘が通ると思っているのだろうか。私は何人もの人物がこの店に入っていくのを見たのだ。無理矢理に押し入ろうと、私は幕末の義士にでもなった気分ですべての静止を振り切り階段を上った。

「何を隠しているのかしら。」

私はわくわくしていた。こんな夜中に大勢の人間が閉店後の京料理屋に集まる。これはまさに小説にあるような事件の前触れではないか。外から見る限り二階の電灯は消えていたが、三階には人の気配があった。私は店主に追いつかれないように急いで階段を上り、三階の大座敷の襖ふすまをガラリと開けた。

そこには数々の破廉恥はれんちな春画しゅんがが広げられていた。

閨房調査団、と彼らは名乗った。いかがわしい玩具・淫らな映像・薄い本などを集める数寄者達が定期的に集まって自らのコレクションを披露したり売買したり交換したりする集団らしい。つまり変態の集まりか、と得心した私は全力でこの場を離れたくなった。しかし私の精根は尽き果てている。再び外に戻ったら数歩も歩くまもなく路地に突っ伏すことになるだろう。

これから東堂という脱団者による臨時の競売があるらしく、参加者には温かいお茶が振舞われていた。私はここでお茶をいただき、しばらく休憩しながら次なる策を練ることに決めた。

「おう若旦那、そろそろ始めるぞ。」と声がかかり、店主は私をつまみ出すことを断念したようだ。彼は紫色の座布団をひつ掴んでぐいっと胡坐をかいた。

競売会の開会宣言が古本屋主人によって行われ、団員はいよいよ体を乗り出し息を荒らげてコレクションを見つめた。私も思わず男女の痴態が描かれた絵を凝視した。

座敷の中を緊迫した空気が走る。東堂氏はすつきりしない面持ちで腕を組んでいる。最初の品物が競売にかかろうとしたそのとき、団員の人々の携帯電話がけたたましく鳴った。座敷内は急に騒然とした。

「おい、李白翁が飲み比べするらしい」

と散髪屋の男性が全員に聞こえるように叫んだ。

李白さん！ そうだ、今夜は李白さんが持つ偽電気ブランを飲み先斗町へやってきたのだった。蓮

子探しにかまけて今まですっかり忘れてしまっていた。確か李白さんは「また会えるだろう」と言っていたはずだ。彼の言ったとおり自体が進みそうで、私は彼の予知能力が恐ろしくなった。

団員たちの反応は様々だった。久々の飲み比べだと感慨深げにする者。見物に行きたいと興奮する者。われ関せずといったふうになつて寝て転がって茶を啜っている者もいる。私自身、ついに偽電気ブランが飲めるのではと胸の高まりを抑えることができなかった。

「誰にも売りやしないぞ」

突如として声が上がった。驚いて窓のほうを見ると、コレクションの所有者である東堂氏が欄干から身を乗り出している。何事が起こったか瞬時には理解できなかったが、彼は自らの春画をむんずと掴むと、狂気の形相でそれを破り捨てはじめた。自分の春画を買うために集まったはずの人々が、関係の無いことで盛り上がっているのが不愉快だったのだろう。

団員たちは飛び上がって口々に東堂氏を罵った。彼らにとつては東堂氏よりもむしろ春画が失われるのが惜しいようで、この狂行を収めるために何人もの団員が飛び上がり東堂氏を取り押さえようとしたが、「近寄れば飛び降りて死ぬ」と言われて手を出せないでいる。

なす術も無くおどおどしている団員を尻目に東堂氏は「もう終わりぢやあッ」と叫んで春画を破り捨て続ける。私は彼を必死でなだめた。

「もう終わりぢやあッ」

聞こえたのは悲痛な叫びでした。見ると男性が三階の欄干から身を乗り出して、手に持った紙を狂ったように破り投げており大変危険です。

窓の中からは「おい東堂何をしている」「夜中に呼び出しておいて何事だッ」「まってください早まっ
てはいけません」「命あつての物種だぞ」などの声が聞こえます。すっかり酔っ払っていた私ですが、
それらの中に馴染みのある声が混ざっているのを聞き逃しませんでした。

「メリー！」

私は叫びました。するとメリーが隣の窓からひよこつと顔を出して、「蓮子！ あんたどこに行つたの！」と叫びました。それはこっちのセリフです。「ちよつと待って、今そっちに行くから！」と叫んでメリーは顔を引っ込めました。

階段を急いで降りてくるメリーと、階段を急いで駆けのぼる私は、料亭の二階でついに再開しました。メリーと私は抱き合つて再会を祝し、今まで何をしていたのかを互いに話しました。ここについて今宵の秘封倶楽部が再結成されたのです。

「それでね蓮子、偽電気ブランは……」とメリーは言いかけましたが、そこでひよいっと私の肩の後ろを覗き込みました。私が振り向くと、そこには天狗さん以下大勢が階段に詰まって三階を目指しています。

「おお、君たち会えたか。よかつたねえ。」と天狗さんは言つて、「李白翁が来た。」と私たちに伝えました。李白翁とは、偽電気ブランを大量に持っているというあの李白翁のことでしょう。私たちの胸は否が応でも高鳴ります。

「ついにこの時が来ました。ぜひ飲み比べを」と私は奮い立ちましたが、天狗さんは「いやその必要はない。君たちは見ているだけで良い」と言つて「とりあえず三階へ。電車に移ろう」と私たちを促しました。私たちは不思議に思いながらも指示に従いました。

三階上がると広い座敷があり、窓の外には庭園が広がっています。この窓は、先程メリーが顔を出したはずの窓です。ここに庭があるなんておかしいな、と私は訝いぶかしみましたが、座敷の中は人間の数に反してしんと静まりかえつてしまい、私が声をあげることがは憚はばかられました。

緊張状態はしばらく続きました。誰も声を発することができず、もはやこのまま夜が明けてしまふかと思われたとき、一人の女性がすつと動いて欄干を越え、庭園に足を踏み入れました。勇気のある女性です。それを合図に座敷の全員が続きました。

庭園に降り立つてみると、それが乗り物の屋上であることがわかりました。「これは何なのですか」と天狗さんに尋ねると、「李白翁の電車だ」と答えました。心なしか緊張しているように聞こえました。天狗さんが緊張するとは、李白翁とは余程の人物なのでしょう。多くの人々に続いて、私は煙突の横にある螺旋階段から電車内へと降りていきました。

○

李白さんは電車で「千歳屋」に乗り付けたようだ。私たちは大学生くらいの女性を筆頭に、順々に中へと入っていった。私は既に入ったことがあったので、隣で「ほー」とか「ひゃー」とか言いながら内装を眺める蓮子を見つめたり、銭湯に飛び込もうとする蓮子を引きとどめたりする余裕があった。

宴会場は人で溢れかえっていて、私たちが着いたころには李白さんも飲み比べ相手も人の輪の中に埋もれて見えなかった。輪の中心から幽かすかに聞こえる声をまとめると、飲み比べのルールは単純で先に飲めなくなつたほうの負け、赤川社長・東堂氏・樋口さんの三人分の借金が賭けられていて飲み比べ相手（女性らしい）が勝つたら借金はチャラ・負けたら二倍になる。

広間の大時計が三回鳴つて午前三時を告げた。丑三つ時もとうに過ぎた、寅とら一つ。「では、始めてください」と声がして飲み比べが始まった。

蓮子は私の横でぴよんぴよん飛び跳ねたり前の人の肩に手をやったりして飲み比べをなんとかして見ようとしていた。しかしそのうち諦めたのか、「つまんないわメリー」と言つてソファに座つてテーブルの上の置き物をいじり始めた。この部屋にあるものは全てが高そうなのに、蓮子はそんなことはお構いなしに、ナイフが本物かどうかを壁を斬りつけて確かめたり、¹⁶人形の手足をひねったり、勾玉

¹⁵ どうしてこう突発的な行動をしようとするのかな。もうちょっと落ち着いてほしい。私みたいに。
¹⁶ 偽物だった。本物だったら黙つて逃げるしかなかった。

のネックレスを首にかけたりしている。蓮子が呪われるのは構わないが私にまで迷惑が及ぶのは御免だ。焼き芋の模型をガジガジかじり始めた蓮子の額を平手で叩いてやめさせた。

「メリー」

痛そうに額を抑えながら、ソファに座るようにと蓮子が私を促す。右側に私が座ると、蓮子はもたれかかるようにして、私の肩に頭を乗せた。

いま言わなければ言いそびれてしまう。ずっと言わなければならないと思っていた言葉を、私はようやく口にする事ができた。

「今日はごめんね、急にいなくなっちゃって。」

心に引つかかっていた謝罪の言葉だった。

「……寂しかったんだから。」

泣きそうな声で蓮子が言った。私は再び「ごめん」と言つて蓮子の帽子を取り、栗色の髪を優しく撫でた。蓮子は私の左腕をぎゅつと抱きしめ、眼を閉じておとなしく撫でられていた。

「今度は二人で来ましょう？ 夜の街を探検するのも、幻想を探しに行くのと同じくらい楽しいそうだよ。」

私がそう言うと、蓮子はうん、と頷いてじっと私の目を見つめた。私はゆっくりと蓮子に近づいて、

その唇を……

わあっ、と歓声が上がる。私たちはびつくりして離れた。蓮子の顔が凄く赤くなっていて可愛い。きつと私の顔も真つ赤なのだろう。

声が上がったほうを見ると、人の輪はぎゆうぎゆうに縮まっていた。どうやら勝敗が決したらしい。ここからでは勝者がどちらか分からないので、どうしようか、と蓮子と顔を見合わせていると、輪の中から李白さんの大声が聞こえた。

「儂に勝利したこのお嬢さんを祝して、皆さんに偽電気ブランを振舞おうではないか！」
蓮子が座った姿勢のまま輪の中心へダイヴした。

○

偽電気ブランのあまりのおいしさに、私は我を忘れたかのように飲みました。メリーも幸せそうな顔をしながら杯を呷あかっています。私たちは李白さんの宴会場の隅にあるソファに二人で座って、メインのテーブルより拝借してきた銀の酒瓶から、かわるがわるお酒を注いでは喉を通しました。

「メリー、よかったですね、偽電気ブランが見つかって。」と私が言うと、メリーは私に向かって微笑んで言います。

「そうね、遠くに行くのではなくて、京都の中で不思議を探求するのも、あんがい悪いもんじゃないわ。」

私はその言葉を聞いて満足しました。今日は彼女のために大変な苦勞をしましたが、メリーの笑顔とお酒の下もとでは全てが良い思い出です。私はニコツと上品に笑って、偽電気ブランをもう一杯いただいてしようとソファから立ち上がろうとしました。

でも、ああ、なんと残念なことでしょう、私はもうすっかり酔っぱらってしまっていて、ソファから立ち上がることが出来なかつたのです。バランスを崩した私はメリーに倒れこみました。メリーは倒れかかる私の体を支えてくれました。やさしいメリー。私の大好きなメリー。メリーの温かさに包まれている幸せな感触が、この夜に関する私の最後の記憶です。

このようにして私たち秘封倶楽部は、偽電気ブランを飲むために妖艶よつえんなる先斗町ほんまちょうを走りまわりました。

銘酒は確実に存在し、あなたが来るのを待っています。偽電気ブランを飲まんぞ欲する読者のかたがた。どうぞ夜の先斗町へ出向き、その不可思議ふかしぎ千万せんぼんをくぐり抜けて幻の美酒を堪能なさってください。もつとも、李白さんとの飲み比べに勝てたとしたら………ですが。



偽電気ブランは、その妖^{あや}しげな名前とは裏腹に、純粹で澄んだお酒だった。香りは心を癒すようで、それでいて口に入ると快感だけを残して無抵抗に喉の奥へと消えてゆく。これなら何杯でも何十杯でも、いくらでも飲み続けられそうに思えた。

蓮子は私のグラスと自分のグラスに偽電気ブランを注いで、ものすごい勢いでお酒を消費していた。「くくんくん」と豪快に飲み干したあと、「ぶはー」と目を細めて緩んだ顔をする、その蓮子の笑顔を見ていると、私が先斗町を走りまわった苦労なんて、なんでもなかったような気がしてくる。「君の笑顔を見るために働いているんだよ」などという使い古された口説き文句があるが、もしかしたら私は本当に、蓮子のこの顔を見るという目標があつたから、一晩かけて先斗町じゆうを歩きまわるこゝろができたのかもしれない。

「ぶつはー！ はあ、いったでしよメリー、偽電気ブランはやっぱりあつたのよおー！」

蓮子は体を左右に揺らしてそう言った。確かに、偽電気ブランは存在した。至高のお酒である。私は素直に認めるのが悔しくて、「そうね、遠くに行くのではなくて、京都の中で不思議を探求するの

も、あんがい悪いもんじゃないわ。」などと曖昧なことを言っておいた。

それでも蓮子はその言葉で満足したみたいで、にやまーり、としまりのないふうに笑ってから立ち上がろうとした。どうせもう一瓶もらつてこようというのだろう、と思つて見ていたが、既に相当な量のお酒を飲んでいた蓮子は、おっとと、とよろけて私のほうに倒れこんできた。

「ちよ、ちよつと蓮子、だいじょうぶ？」

私は全身で蓮子を受け止めた。彼女は私の胸に顔を埋めるようなかたちになつて、「むにやー、メリーむにやむにや」と酔人語ずいじんごを話している。蓮子の唇が動くのがくすぐつたい。

「もう、蓮子。だらしないわよ？　あなたが飲みたいって言いだしたお酒でしよう？」

両手で蓮子の肩を抑えて、彼女を私から引きはがした。だらしな笑みを浮かべながら蓮子は首をくによつと傾かげて、「メリー」と甘く私を呼んで、私がそれに答えて顔を傾けたところで、すつ、と唇を重ねてきた。

不意をつかれて何をされたのかわからなかった。そして一瞬後、ピントが合わないくらいの近きで蓮子が幸せそうに目を閉じているのがわかった。思わず「ん……！」と声をあげてしまい、余計に恥ずかしくなった。

蓮子はずるい。おいしいところはぜんぶ、こうやつて持つていってしまうのだ。

口づけをしたときと同じようにやさしく唇を離して、蓮子は恥ずかしそうに笑った。

そんな蓮子が愛おしすぎて、はにかむ蓮子の首筋に手をまわして、私もお返しにキスをした。蓮子は私の肩に腕をかけて、引き寄せるように私を支えた。

ぱち、と音がした。ぱち、ぱち、ぱちぱちぱち……と、その音はなんども何度もくりかえして、李白さんの宴会場の中を響きわたった。私たちに向けた拍手のようにも聞こえる。電車の壁や床が揺れて音を伝えた。水に何かを打ち付けたようなその音は、私たち二人を祝福するかのように電車中に広がっていった。

びちや、と音を立てて唇が離れる。蓮子は私を見て「にまー」と笑うと、私の膝を枕にしてソファに横になり、ぐーぐーと寝てしまった。

「まったく、そんなに大きいびきをかかれちゃ、雰囲気だいなしじゃない？」と蓮子の髪を撫でる。膝の上で「にやむにやむ」と鳴く蓮子。こうやっていると恋人というより子供みたいに可愛くて、私は蓮子のほっぺたにまたキスをした。

「青春かな、青春かな。」

と声がしたので顔をあげると、李白さんが銀の酒瓶をもってこちらにやってきた。今を見られていたのだろう。恥ずかしさに顔が赤くなるのが分かる。

「ま、飲みなさい。」そういうと李白さんは私のグラスに偽電気ブランをなみなみと注いでくれた。私

も李白さんにお酌をした。李白さんはコップのお酒をごくりと飲み干すと、酒瓶と一緒に近くの机に置いた。そうして机に寄りかかりながら蓮子をじつと眺めて、また私のほうを見て、それから窓の外を向いてほうつ、とため息をついた。

「やはりまた会えただろう。」李白さんはつぶやいた。本に書いてあったのだとでもいうような、当たり前なことを言っただけというふうな顔だ。

李白さんが眺めている窓を見ると、暗い先斗町の街並みが三階建電車の明かりに照らされてぼんやりと光っている。こんなに美しい夜もいつかは終わる。蓮子とこの町を走り回った夜が思い出に沈む。空には夜明けの気配が近づいていた。私は偽電気ブランをぐいっと飲んで、その弾みに零れてしまい、そんな涙を懸命にこらえた。

「ねえ君」

沈黙を破り、ふいに李白さんが私に言った。

「境界まどから見える外界けしきはいいねえ。」

李白さんは窓の外を見ながらつぶやいた。私に言っているようで、ただ独り言をしているようで、私以外の誰かに向かつて言っているようにもみえた。

「外界そとには絶対に見えないものが、境界カラスを通すと視えてくる。」

「でも、外界おもてでないと視えないものもあります。」

私の言葉を聞くと李白さんにはにっこりと笑って頷いた。

「うむ。それが分かっているなら大丈夫だ。君は頭がいいね。それに目もいい。その目を大切に。」
李白さんは「少しもらおう」と私のコップを片手に取りあげ、窓のすぐそばまで近づいた。そしてじつと外界を眺めて、にっこりと笑うと、先斗町に向かつて乾杯するかのようにコップを差し上げた。それを合図に、ぐ、ぐつ、と部屋が揺れて、電車が動き出す。はずみで転げ落ちてしまわないように、寝ている蓮子の腰をすつと押さえた。

その時私は、境界を見た。

リボンの付いたかわいらしい境界が音もなく開き、李白さんに近づいていく。李白さんは窓の外を見たまま「君の悪戯には毎回呆れるよ。」とつぶやいた。すると境界の中から、くすつ、と笑い声がして、境界はすうつと消えてしまった。李白さんはちび、ちび、と偽電気ブランを飲んでいた。

ゆつくり、ゆつくりと、電車は先斗町の南へ向かう。町の灯り^{あか}を右手に、鴨川の闇を左手に、電車は静かに通りを流れてゆく。

星々の中を旅する鉄道のように、ゆつくりと。

私と蓮子の二人を乗せて。

がたん、ごどん。

夜は短し恋せよ少女
了

「あとがけ」は「あとがき」の命令形

楷ノ木です。はじめまして。

小説本を出すのは初めてで、つまりあとがきを書くのも初めてなので、何を書くべきか完全に見失っております。

音楽サークルであるはずのアンヴァランスが秘封SSに手を出した理由はひとつ。そこに秘封オンリーがあつたからです。この本は二〇一〇年十一月二十八日に開催された秘封倶楽部オンラインイベント「境界から視えた外界^{けしき}」のために書き下ろされたもので、「秘封といえばSSだろ！」とかいう安易な思考の末に生みおとされたものです。いわゆる「100%趣味で書かれた小説」であります。妄想をただ形にただけであります。妄想は前のページまでで一段落しているので、あとがきにも特に書くことはありません。しかし何も書かないのも本としての体裁を整えるという意味であれなので、ここにも妄想を書きなぐりたいと思います。

「メリー、えっちいことしましょう。」

蓮子は全裸でメリーに迫った。

「おぬし、我とえっちいことせんと欲するか。」

老師メリーは長い顎髭^{あごひげ}を優雅に振って言った。 齢八十歳。 人生はここから本番と言わんばかりの

立ち振る舞いである。

「我とえつちいことせんと欲するものは、世界に散らばる37の秘封玉ひふうだまを集めよ。」

蓮子はその言を聞くと、一目散に旅立った。そして20年後、見事に悪魔大王を倒し、36つめの秘封玉を手にした。

「残りの一つはいつたどこに……？」

蓮子の胸が突如として光り出した。小さな胸の谷間からこぶし大の光る玉が！ なんと、最後の秘封玉は蓮子自身の中にあつたのだ！ 全てを集めてメリーの元へ向かう。しかし、老師も寿命には勝てぬ。メリーは死の床にあつた。

「我はもはやえつちいことはできぬ。しかし、最期にちゅつちゅだけなら……」

蓮子はメリーとちゅつちゅした。メリーは微笑みながら昇天した。蓮子は終始全裸であつた。
「こんなお話を例大祭で出しましょうよメリー」「アホか」

よし、埋まったな！ それではまた会う日まで。ちゅつちゅー！

もうちよつと真面目にあとがくべきだつたかと思つている

楷ノ木かえで

夜は短し恋せよ少女

2010/11/21 ver.

著者

楷ノ木かえで

<http://twitter.com/KainokiKaede/>

発行所

UNVALANCE

<http://www.unvalance.com/>

この作品は、ZUN様（上海アリス幻楽団）による東方Project、森見登美彦様による『夜は短し歩けよ乙女』『四畳半神話大系』の設定を使用した二次創作物です。原作の著作権は各々の作者様に帰属します。また、この作品自体にはCC BYを適用します。

組版には TeX を使用しています。

フォントはIPAフォントを使用しています。